

二宮： 荒川さんにはお嬢様っぽいイメージがありますが、実家は普通のサラリーマン家庭だそうですね。

荒川： そうです。私がスケートをやっていたので、家計は火の車でした。母も働いて、祖父も援助してくれたおかげで何とか続けてこられたのが本当のところですよ。

二宮： レッスン代に用具代、衣装代……トップになるまでは経済的にも大変だったでしょう？

荒川： だから学生時代はファーストフード店やコンビニでアルバイトをしていました。普通の大学生と変わらなかったですよ。

二宮： それは親御さんにとってはありがたい。

荒川： いや、フィギュアスケートをやっていること自体が親不孝みたいな話ですから(苦笑)。リンクを借りてグループで練習をする時も利用料は人数割りになるので、人が少ないとドキドキしましたよ。「今日はレッスン代、上がっちゃうな……」と。

二宮： フィギュアは世界が舞台ですから遠征も多い。

荒川： 当時、遠征に伴うコーチの費用は選手側の負担だったんです。だから、一緒に習っている他の生徒に便乗して、コーチ費用を割り勘できる環境で行ったり、いろいろ工夫しました。

それでも引け目は感じませんでした。今ある環境を最大限に生かして、精一杯戦うしかない。私はこれだけしか与えられないからできないと思ったら、その時点で負けですから。



真央VS.キム・ヨナの行方は？

二宮： 最近では安藤美姫選手や浅田真央選手をはじめ、男子の高橋大輔選手、織田信成選手も台頭して、フィギュアスケート人気が一段と高まっています。現状をどう見えていますか？

荒川： フィギュアスケートの人気や注目度が高まるのはうれしいことなのですが、競技本来の道を外れた部分で加熱気味になってしまうと心配に思うところが正直あります。今後、この人気を引っ張っていけるかどうかは私たちも含めた選手の力にかかっています。やはり、観ている方を飽きさせないよう、新たなことにどんどんチャレンジしていく必要があるでしょうね。

二宮： バンクーバー五輪が来年に迫ってきました。真央ちゃんとキム・ヨナ(韓国)のライバル争いはどちらに軍配が上がるのか。勝敗を分けるポイントを教えてください。

荒川： これは難しいですね。2人に関していえば、現時点で力は互角。しかもタイプが違うので適切な比較には至らない。それぞれポイントを稼ぐ部分が違うんですね。これができれば、相手が敵わないというポイントではない。2人がパーフェクトに演技ができれば、どちらが上かを決めるのは本当に困難でしょう。最終的にはいかに自分の力を最大限に発揮できるか。メンタル勝負になると思います。

二宮： ダークホースが浮上する可能性は？

荒川： 彼女たち2人の持つ力はズバ抜けているように感じられますが、オリンピックは何が起こるかわからない世界ですからね……。

二宮： フィギュアでは失敗で順位がひっくり返ることがよく起きます。たとえば前の選手がミスをする、「逆転可能な演技をしよう」とか多少、変化が出たりしますか？

荒川： そう思われがちなのですが、実は待っている間に人の演技を見ていないんですよ。どんな演技をしたかは、歓声や拍手で感じる程度。むしろ他人の失敗を見てしまった場合に、自分が普通にやれば勝ると意識してしまう。「普通に」と意識すればするほど、普通にやるのは難しい。メンタル面が左右されてしまうので、あえて見ないと言った方が精神的に影響を与えないというところでしょうか。

二宮： リンクに立つ時のメイクは誰かにやってもらうのですか？

荒川： いや、自分でやります。このメイクから試合は始まっていますね。一発で髪の毛も化粧も決まるといいのですが、何度やり直してもしっくりいかないと、「今日は、なんか気持ちに乗っていないな」とマイナス思考に陥ってしまう。

二宮： 緊張感がピークに高まっているだけに、ささいなことでもナーバスになってしまうと？

荒川： どうでもいいことが気になりますね。特に調子が悪いと集中できない。ジャンプを跳ぶ直前に「家のカギ閉めて出たかな？」と不安になったこともありました。オリンピックの時もフリーの演技がスタートしてすぐに、審判席を見て、「ショートの時も、この人がレフェリーだったかな」と思いながら滑っていましたね。「今、そんなこと思い出さなくてもいいだろう」という自分と、思い出しちゃう自分とが戦っている(笑)。

ジャッジは猫でもできる！？

二宮： 実際にフィギュアスケートを体験したことがない私にとって、一番わかりにくいのが採点システム。毎年のように基準が変わるので、新方式についていくので精一杯です(苦笑)。選手たちは滑っていて、このくらいの点数が出るというのはわかるのですか？

荒川： だいたいは分かりますが、自分がつけた点数と違うということはよくあります。ジャッジも人間なので、主観が入ったり、名前や演技内容に引っ張られてしまうところがある。トップクラスになると、本来の滑りが出せなかったり、少々ミスがあったとしても高得点が出るだろうという選手もいます。世界選手権のメダリストクラスが、ショートプログラムで失敗しても下位になることはないのは、そのためもあるかもしれませんね。。

二宮： 同じ演技でもジャッジによって、点数が大きく異なることもあります。プロがつけていて、こんなにも差が出るものか。疑問を感じます。

荒川： 今のシステムでは、まず技を認定するスペシャリストがいて、そのジャッジが定めた技の基礎点に対して、他のジャッジがそのできばえをプラス3からマイナス3までの幅で評価しています。私にも、どうしてプラス1のジャッジがいればマイナス3のジャッジもいるのかわからない。本当に見ていたのかなって思っちゃう時も実際のところありますね(苦笑)。

二宮： 荒川さんがわからないんだったら、一般の人はもっと分からない。

荒川： もしわからなかったり、見逃したならば0をつければいいと思っちゃうんです。こんなにバラバラなら正直、猫が座っていてもボタンを押すだけなので同じなんじゃないかと(笑)。プラス3からマイナス3までアランダムにつけたのと変わ

らないですから。

と、いうことにならないためにも、技ひとつひとつに点数を持たせる採点法を取り入れる以上、選手がやったことに対して、スペシャリスト以外のジャッジも含めて、自信を持って点数をつけていく、目の前で起こったことをしっかりと明確に見極められる「目」を持つ必要があると思うのです。その点数の積み重ねが、選手の運命を左右するのですから。



二宮： 点数について解説するのも一苦勞ですね。

荒川： 今の方式は解説する側にとっても難しい。なぜ、この選手の点数が伸びなかったのかを説明しようにも、同じように演技した選手が意外にも得点を伸ばすことがある。そうなるとうしてこのような点数が出たのか指摘しづらいこともあります。そうすると演技を褒めるしかなくなるんです。これでは、納得のいく解説にはならないですよ。

二宮： 裁判員制度みたいに、これからは一般の方も加えるのも一案かもしれません(苦笑)。

荒川： 「猫と一緒にじゃない」って反論するくらいの自信と信念、誇りを持っているジャッジに採点してほしいですね。実はジャッジにはフィギュアスケートの未経験者もいるんです。ルールだけを勉強して受験を受け、ジャッジを務めている。「本当はこれは高度な技なのに」と思うものが適切な評価にならなかつたり.....。

二宮： 現行のルールは採点基準を明確化するために導入されたと聞きましたが、選手の感覚からすれば実態は逆だと？

荒川： 基準を細かくすればするほど、明確じゃない部分が目立ってしまうんですよ。そもそもフィギュアスケートは人の主観が入る競技。採点の明確化をウリにできるものではないかなと。技の認定には「何秒、その状態を保つか」「何回転するか」といった数値が定められていますが、フィギュアの特徴にはそぐわない。これでは、たとえ音楽に合わなくても、3秒、技を続けたほうが点数になるという話になってしまいます。

二宮： 以前はジャッジ別に国籍と点数が出ていましたが、近年は誰が何点をつけたのかわからないシステムになっていますね。

荒川： ソルトレイク五輪で判定に対する疑惑が浮上して、国同士での採点の裏取引を防止するためにジャッジの匿名化が行われました。でも、不可解な点数を出せば、そのジャッジが責められるのはプロである以上、当たり前。点数の出所をあやふやにしたら、ジャッジ能力は全く問われなくなってしまいます。選手よりもジャッジを守るためのルール改正と思わざるを得ませんね。

スケートリンク維持にエコアイデアを

二宮： フィギュアスケートの将来を考えた時に心配なのが、維持費の問題でどんどんリンクが国内から減っていること。子どもたちがスケートをする場を失えば、新たなスターは誕生しません。

荒川： 海外では、発電所やゴミ焼却場の近くにスケートリンクがあるというように、電力を効率よく利用する省エネ、つまり環境に配慮した施設づくりが目立ちます。焼却で出た熱などを活用してリンクを運営している。余った熱なのでコストがかかりません。お客さんが入らなくても長く維持できているところがたくさんあります。

二宮： それはエコですね。日本でもゴミ処理熱をつかった温水プールは見かけますが、外国を見習って有効なエネルギー

一活用法をもっと考えるべきでしょう。

荒川: 日本のスポーツ施設はまだまだ効率がよくないですよ。スケートリンクとしての名目で最初から建ててしまうから維持費がかかってしまう。余った熟で何かをする、余った土地で何かをするという発想に転換できるといいのですが……。

二宮: 施設をつくっても、どう維持するか、どう活用するかに目を向けていない。ハコモノ行政の弊害です。

荒川: 最初からスケートリンクだけのために建てると、観客席もある大きな箱をずっと冷やしておく必要がある。これは効率が悪い。外国では普段はリンクの上にフロアを敷いてイベント会場や体育館として使っているところも多いです。ひとつの箱で多目的に使える施設ができると、スケートも他のスポーツももっと身近に楽しめるようになるでしょう。

二宮: 金メダルを獲って、すぐにプロスケーターの道に進まれました。周囲には「もったいないね」とか「次の五輪まで続けて」という声もあったのでは？

荒川: 「潔かったね」ってよく言われました。でも、もともと私はトリノが最後と決めていた。というよりも、トリノ自体、私の中では予定よりオーバーして出た大会だったんです。もうその時点では、次はプロとして氷に立ちたいと決めていました。アスリートとして満足な形で終われない選手が多い中、私は納得のいくいい形でアマチュアを引退できた。これは幸せなことです。金メダルによって今後の人生でチャンスは広がったと感じています。それなら、この先チャンスをしっかり自分でつかまなければならぬ。金メダリストとして、出会った人をガッカリさせる存在にはなりたくないと思っています。

観客が力を与えるアイスショー

二宮: アイスショーを一度、外国でみましたが、照明や演出が鮮やかで、観客席と一体となって盛り上がっている。競技とは違った魅力がありますね。8月のアイスショーはご自身がプロデュースされるとか？

荒川: はい。といっても、まだ構想を練るのはこれからです。短期間で一気につくります。私がアイデアを出すのは簡単ですけど、制作スタッフは大変でしょうね。「この人、また急にこんなこと言い出したよ」って(笑)。

二宮: 演技者でもあり、演出家でもあり、裏方ですもんね。大変でしょう？

荒川: 正直、毎回、本番を迎えるまでにやるが多すぎてパンクしちゃうんじゃないかと思ったり、ショーがスタートするまでには、「来年はもう無理だあ！」って思うことが何度もあります。ですが、終わってみてお客様から喜びの言葉を頂けた瞬間、それまでの苦勞が吹っ飛んで「来年も頑張ります！」って前向きになれちゃう。お客様に支えられている面が大部分ですよ。

二宮: お客様の応援が最大の力になるんですね。

荒川: 一番、心に残っているのは小児マヒの子どもとの出会いです。そのお母さんから「荒川さんの演技を見た時に普段はほとんど動くことがない子どもが表情を変える」ってお手紙をいただきました。ただ、「来年、生きてこられるか分からない」とも。次の年、その子の顔を会場で見た時に、涙が出そうになりましたね。もし私のやっていることが、少しでも誰かの力になれるのであれば、自分の大変さなんて小さなこと。もっと私も頑張らなくてはいけない、立ち止まってははいけない。そう思わせてくれました。

二宮: 荒川さんのパフォーマンスを心待ちにしている方は全国にたくさんいるはずですよ。

荒川: 「スケートを通して少しでも人の力になれることが世の中にあるんだ」と改めて感じています。知らない人同士とつ

ながって、力をもらえるのが、スポーツやエンターテインメントの素晴らしいところ。これからも私のショーを見たいという方がひとりでもいる限り、続けていきたいと思っています。

二宮： 話が進むにつれ、気づけば飲むペースもだんだん速くなってきましたね(笑)。

荒川： そうですね(笑)。おいしくいただきました。お酒が入ると同じ物事でも別の角度から見えてきたり、新しいことを思いついたりします。次のアイスショーの構想もお酒を飲んでいる時に浮かんでくるかもしれませんね。

<荒川静香(あらかわ・しずか)プロフィール>



1981年12月29日、神奈川県出身。プリンスホテル所属。5歳でスケートを始め、小学3年で3回転ジャンプをマスター。天才少女と呼ばれる。94年～96年には全日本ジュニアフィギュア選手権3連覇を達成。97年にシニアへ移行後、日本選手権で初優勝。98年、長野五輪出場を果たす。2004年、ドルトムントの世界選手権では技術点で満点の6.0をマークし、ワールドチャンピオンに輝く。06年のトリノ五輪ではショートプログラムとフリースケーティングで自己ベストを更新して金メダルを獲得。日本フィギュア界で初めて世界選手権と五輪両方での金メダリスト

となる。同年、プロ宣言を行い、現在は国内外のアイスショーを中心に、テレビ出演やイタリアのピエモンテ州の観光大使などさまざまな分野へ精力的に挑戦している。この8月には自身がプロデュースするフレンズオンアイス(>>公式サイト)が開催される。

この人と飲みたい(第2、4木曜更新)：荒川静香(プロフィギュアスケーター)<前編>「金メダルよりうれしかったこと」

投稿日時：2009-05-14 13:09:00

二宮： はじめまして。荒川さんにはぜひ一度、お話を伺いたいと思っていました。金メダルを獲得されて3年。ようやく願いが叶いました。お酒も相当好きだと聞いていますよ。

荒川： どこからそんなウワサが出たんでしょうね(笑)。でも、お酒が入ると気持ちがいい状態がずっと続くタイプですね。以前と比べると飲む量は減りましたが。二宮： 現役の頃は練習後の一杯が何よりの楽しみだったとか？

荒川： 試合前だろうが、食事の時にお酒を楽しんでいました。飲まなかったのはオリンピックの時だけかもしれません。昔は今から考えると食べる量も多かったですね。いくら食べても夜中にお腹がすいてくる。“底なし”の胃袋でした(笑)。

二宮： それだけ練習もハードだったんでしょうね。

荒川： そうですね。すごく代謝も良かったんじゃないでしょうか。最近は食べる量も普通になりました。

二宮： 好きなお酒はビール？

荒川： 何でも飲みます。わりと最初に頼んだものを最後までずっと飲み続けることが多いですね。

二宮： では、今日は、この「ザ・プレミアム・モルツ」で最後まで滑り終わしましょう(笑)。

荒川： よろしくお願ひします(笑)。



五輪は“ゲーム”

二宮： これまで五輪やサッカーのW杯など、大きな国際大会は必ず現地で取材をしているのですが、3年前のトリノ五輪だけは行けなかった。正直、荒川さんの演技を生で見られなかったことを今でも後悔しているんです。

荒川： オリンピックの時のメンタルは、私の中では特殊なものがありました。フィギュアスケートは点数を競う種目ですが、「試合ではない」「戦いではない」という気持ちだったんですよ。

きっかけになったのはタチアナ(・タラソワ)コーチの一言。前年の夏に「オリンピックはウィンターゲームスって言うじゃない？ コンペティションじゃなくてゲームっていう気持ちで臨んだら？」ってアドバイスされたんです。その言葉はとても新鮮でした。

それまでの私はコンペティションで勝とうという気持ちが強すぎた。なかなか高得点が出ないことに悩んで、競技に向いていないんじゃないかと考えたこともありました。トリノの場合はオリンピックというゲームに気持ちよく臨もうと思ったのが良かったのかもしれない。

二宮： 相手を倒そうという発想ではなく、自分が最高の表現をすることに徹しようという気持ちだったわけですね。

荒川： ええ。もうひとつはオリンピック自体を楽しもうと感じていました。オリンピックの特殊な緊張感に飲まれている選手を観察したり、外から客観的に大会をとらえたほうが自分の記憶にも残るし、面白いんじゃないかと。

オリンピックのレベルまでくれば、どの選手もテクニックに大きな差はない。ほとんどがメンタルの勝負です。だから、フリーの時に最終グループのスケーターたちがどんなメンタルで臨んでいるのかを見るのがひとつの楽しみになっていました。それがいい意味で自分を緊張から救ってくれたのかもしれない。

二宮： その辺りのメンタルコントロールは長野五輪で一度、大舞台を経験したことも影響しているのでしょうか？

荒川： ありますね。やはり長野のオリンピックは、ただ夢の中にいるような感覚で、自分がどう戦えばいいのか、どういう気持ちで氷に乗ればいいのか全く準備できませんでした。今ある状況についていくのが精一杯だったんです。

そして16歳で大きな舞台を経験したことで、オリンピックに対して少し満足してしまっただけで、もうちょっと自分らしくスケートを楽しみたい、普通の学生生活を送りたいという気持ちが強くなってしまったんです。正直、次のソルトレークの予選では真剣にオリンピックに出たいとは思っていない自分がいました。もちろん4年後のトリノなんて、全く考えていませんでした。20歳で引退して、残り2年間を大学で過ごして、社会に出ようと思っていましたから。

二宮： ところが長野から8年後、トリノの出場権を得て頂点に上りつめた。どの競技でも2大会連続出場して、前回の反省を生かして金メダルというケースはよくあります。でも、1大会ブランクがあって金メダルというのはあまり例がない。



荒川： トリノの時は、「オリンピックって誰もが経験できることではない。大事に演技しないとつたいないな」と感じる自分がいました。だから、長野とは違って、どんな気持ちでオリンピックに入っていくべきか、事前に準備しようと意識していました。

そこで自分をコントロールするためには、まず私自身の弱点を知り尽くしていなければいけない。それまでの私は緊張に弱くて、大事なところでいつもチャンスを逃してきました。それなら、どういう時に緊張して、緊張したらどうなるかを知らなくてははいけない。緊張するのは当たり前で

すから、この状態でどう自分を保つかを考えていましたね。

二宮： その結論として、「コンペティション」ではなく「ゲーム」という感覚が生まれてきたと？

荒川: そうですね。自分が逆境に立っている時こそ、それを面白がらないといけない。以前は逆境に入ると抜けられないことが多かったので、自分の思考パターンを変えればいいのかでは、と考えました。緊張している自分を楽しんでみてあげるくらいの余裕を持とうと。

二宮: リンクの外にもう一人の荒川静香がいて、客観視して自分をコントロールしている感覚でしょうか。

荒川: メンタルの部分だけはリンクの外に切り離しているような感じですね。でも、緊張の渦中にあるメンタルも感じたい。緊張しているのを悪いことだととらえないようにはしていました。緊張から完全に解放されるのは難しくても、緊張から自分を少し救ってあげる。このレベルに自分を導けないかなと思っていましたね。

後悔しなくなかったコーチの変更

二宮: ただ、精神面でのアドバイスを与えてくれたタチアナコーチとの契約を五輪直前に解消し、ニコライ・モロゾフコーチに指導を仰ぎました。本番直前の変更はかなりの決断だったのでは？

荒川: 本当なら、代えなくなかったですよ。タチアナコーチからは表現面を含め、本当に大事なことを学びました。たとえば、ひとつひとつ丁寧に演技することの大切さ。「ダイヤモンドを拾うように滑りなさい」と言われました。

でも、その時点で自分に足りないもの考えたときにニコライコーチの指導を受けたほうが良いと判断しました。決断までは悩みましたが、このまま立ち止まることより前に進もうと決めました。

二宮: 自分に足りないものとは具体的に？

荒川: 足元での細かいステップです。ここで点数を重ねていかななくてはいけないのに、審判の評価は低かった。ニコライコーチはアイスダンスの元スケーターで年齢も30代と若いので、実際にリンクの上で指導してくれる。タチアナコーチが教えてくれたエモーショナルな部分と、ニコライコーチの組む細かいステップのシークエンスをうまく融合できればと考えていました。

二宮: 周囲にはコーチの変更を反対した人もいたそうですね。

荒川: でもシーズン中ですから、悩んでいても時間は過ぎてしまう。後ろを振り向いている時間はなかったんです。それまでの自分は他人のアドバイスは素直に聞き入れるタイプでした。とはいえ、どこかスッキリしない部分があったんです。もうトリノは最後の五輪になると決めていましたから決断しないで終わるより、決断して終わりたかった。やらないで後悔するのが、一番の後悔ですからね。

自分の心で滑れた『トウーランドット』

二宮: もうひとつの大きな決断はフリーの曲目を『幻想即興曲』から『トウーランドット』に変えたことです。

荒川: 1月に日本代表合宿をトリノの会場でやった第一印象は、「音楽がじっくりこないな」。それをコーチに伝えたら、「じゃあ、どんな曲なら会場に合うと思うの？」って聞かれて、真っ先に出てきたのが『トウーランドット』でした。自分がこれまで何回か使ってきて、滑っていて一番心地がいい。やはり自分が好きな曲で、それをたくさんの人に伝えたいって気持ちで氷に立ったほうが素晴らしいんじゃないかと思ったんです。

二宮: 『トウーランドット』はイタリア人にも馴染みのある作品です。その点も考慮したと？

荒川: その時にはそこまで考えたわけではなかったんです。結果としては、イタリア人の(ジャコモ・)プッチーニが作曲

したり、開会式で(ルチアーノ・)パヴァロッチが歌ったり、イタリア人がよく知っている曲だった。何か不思議な縁ですね。

二宮： しかも、その中の「ネッスンドルマ(誰も寝てはならぬ)」の一節にはこんなくだりがあります。「夜よ、失せろ！ 星たちよ、沈め！ 夜が明ければ、私は勝つのだ」。トリノと日本の時差は8時間。日本ではまさに夜明けの金メダルでした。

荒川： これも後でオペラを見に行き行って知ったんですよ(笑)。もともとは旋律や曲の流れが好きだったんです。04年に世界選手権で優勝した時も同じ曲でしたし、過去に3シーズン使っていて自分の心で滑れる。戦う上では自分を奮い立たせてくれる曲をあえて選ぶこともあります。オリンピックはそうじゃないと感じたんです。

二宮： 「コンペティションではない」という気持ちが曲目にも表れたと？

荒川： フィギュアスケーターの中には、技を競うことを目的として、観客の心に届かないような演技をする人もいます。でも、私はそれではいけないと思っています。高い技を出しながら、観ている人の心にもメッセージをぶつけていきたかったんです。特にフリーは最後の演技だし、伝えられるモノをすべて伝えきる4分間にしたかった。

二宮： 基本的にフィギュアスケートは欧米のスポーツです。いくら日本人の私たちがすばらしいと思っても、欧米人が受け入れてくれないと評価されない。トリノでは現地のイタリアの人たちがスタンディングオベーションをして、荒川さんの演技に感動している様子がテレビ画面からも伝わってきました。



荒川： うれしかったですね。結果は金メダルでしたけど、最大の目的は自分の演技をたくさんの方の記憶に残すことでしたから。何よりうれしかったのは、イナバウアーという、つなぎの技をたくさんの方に知っていただけたこと。これが私にとって最高の結果だったなと感じています。

二宮： 当時は誰もがイナバウアーのマネをしていましたよ。本当は足のつま先を180度開いて真横に滑る技なんですけど、ただ後ろに反って背伸びをしているだけの人もいました(笑)。

荒川： 帰国後、小さい子に「ママ、イナバウアーがいるよ」って言われたこともあります(笑)。ある意味、私の名前より有名になりましたね。

コーチが背中を押したイナバウアー

二宮： 実はイナバウアーは得点に直結しない技です。その点のリスクは考えませんでしたか？

荒川： 確かに点数にならないものを入れて、その後の演技で失敗したら何の意味もありませんよね。曲目を『トゥーランドット』に変更してから1カ月間は、数字との戦いでした。点数の構成を抜け目なく組んだ上で、入れられるものなら入りたい。コーチと一緒に「前の選手がこう滑った場合は、こう行こう」と綿密なプランを紙に書いていきました。その結果、最後の3連続ジャンプの前に5秒だけ時間ができた。

二宮： そこで荒川さんがゴーサインを出したと？

荒川： 最終的に背中を押してくれたのはニコライコーチでした。3連続ジャンプを成功するか失敗するかは大きく点数に影響します。後半最大のヤマに向けて、できれば息を整えたい。「危険な賭けをしたくないな」。そんな思いが一瞬、頭をよぎりました。

でも、コーチが「イナバウアーを入れよう。そのために5秒つくったんじゃないか」と半ば強引に勧めてくれたんです。「こ

の曲で一番きれいにイナバウアーがはまる部分なのにもったいない」と。ニコライコーチは普段、抜け目なく得点を稼ぐことに主眼を置くタイプなので、この一言は意外でした。よくよく考えてみると、私が目指していたのは点数を稼ぐことではない。自分の良さを最大限に見せることです。コーチの言葉でハッと我に返ることができました。

二宮：メンタル面での発想の転換、コーチの入れ替え、曲目の変更、イナバウアーの採用――。ひとつひとつが、パズルのように組み合わせあって素晴らしい演技につながっていったんですね。

荒川：いろいろあったシーズンだったので、オリンピックの舞台に立った時は自分にとって一番ラクな精神状態でした。トリノまでは、やはり結果を残すために観客の心に届いているかどうかに関係なく、点数を獲得するためのスケートをしてきたように思います。

でも、私の本当の思いはそうではなかった。結果よりも、心のこもった演技をみせたい。相反する2つの気持ちを抱えながら進んでいくのはツラかったです。最後の最後でようやく自分の思いに正直になって、私自身を解放できました。それが表情だったり、全ての演技にいい方向につながったのかなと思っています。

二宮：荒川さんの演技には点数を超越した美しさがありました。「ゲーム」に臨んだ荒川さんがあえて戦ったものをあげるとすれば、「点数をつけることの無意味さ」だったのかもしれないね。

荒川：「一番大事なのは気持ち」。これがオリンピックで得たものです。自分の思いを伝えようとする“気持ち”、やりたいことをやり抜こうとする“気持ち”。これはフィギュアスケートに限らず他の分野でも同じかもしれません。どんな思いを持って、自分はどうなりたいのか。そのビジョンが大切なんだと思っています。